郷土史 ていね

第 15 号

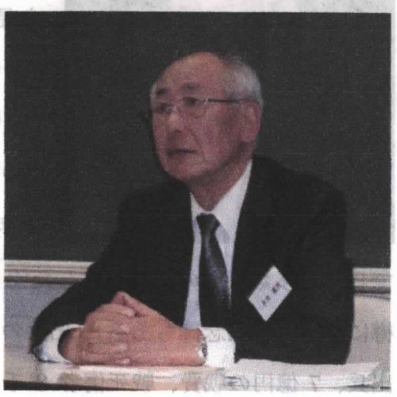
平成 21 年 3 月 11 日

手稲郷土史研究会会報

第 34 回（平成 21 年 2 月 11 日）定例会の研究発表要旨

ほまれ町内会30年よもやま話

手稲郷土史研究会会員　永井　道允　氏



ほまれ町内会は、手稲区役所北側の一角にあります。創立 30 周年を迎えたのを機に記念誌「思い出で綴るほまれの 30 年」を発刊しました。60 万円の予算で 500 部印刷、会員 336 戸全戸のほか区役所など関係方面に配布しました。永井氏は同町内会の総務部長。例会には現会長の笹渕吉弘氏、2 度、通算 7 年間、会長を歴任した佐藤至氏も同席しました。

以下はその講演要旨です。

◆

30 年の節目に記念誌を作ろうとの話が突然出た。永井にまかせれば、なんとかなると思われたらしい。はたと困った。が、救いの神がいた。「ほまれの記録魔」といっていい佐藤氏の存在だった。まあ、見てください。

（巻紙をひもとくと、会場の横幅をはるかに越す大きさ。聴講者もびっくり。昭和元年から現在まで、町内会のできごとはもとより、札幌、道、国、国際問題まで、表裏いっぱいに手書きの文字で埋っています。チラシや各種資料がヤマのようにあるといいます）

佐藤氏は、元国鉄職員で、ほまれ町内会会長のほか、手稲中 PTA 会長、軽川桜並木づくりなどの役員として尽力された方です。年表はこの記録で完成しました。

昭和 47 年、170 区画が分譲され、昭和 52 年、前田西 2 町内会から独立しました。

我が家の台所から鉄北小の職員室が見えました。1 年生のこどもの背丈とほぼ同じセイタカアワダチソウが一面に生え、ハト、カッコウ、バッタ、コーロギ、キジもいました。

タールの臭いがする湿地があり、これが日石跡地だったことが後でわかりました。

区民の急激な増加は、鉄北小の推移をみれば一目瞭然です。市内でも有数のマンモス校となり、最高時には 43 学級、1856 人に膨れ上がりました。運動会で、号砲が鳴ると、グラウンドの両側を生徒が走る。遊戯でもわが子がどこにいるかわからなかったくらいです。日曜参観で学校に行ったら、プレハブが次々増築されていて、まさに迷路。やっと、教室にたどり着いたら授業が始まっていた場面も。

道道の拡幅、旧適正化配置の名のもと、山口、前田、富丘に分家され、さらに前田中央小と孫も誕生しました。西友の進出、区役所の新築によって、周辺整備は一段と進み、雨に当たらず電車に乗れるようになり、買い物も楽になりました。が、町内会にとっては問題もないわけではありません。アパートの林立によって、モンスターペアレントの出現です。ゴミの分別はしない、曜日は守らないなどです。個人情報の過剰反応によって国勢調査も難しくなったと聞いています。孤独死も体験しました。生活弱者が増えているのも現実です。

これまで何度か転居しましたが、ほまれ町内会のみなさんとの交流が日に日に深まり、楽しく過ごしています。さらに、このたびは郷土史研に加入させていただき、こんないいところは外にないと思うようになりました。

今後ともよろしくお願いいたします。　［文責：一ノ宮］

【お詫び】素敵な年表巻紙は、撮影に失敗しまして掲載することができませんでした。お詫びいたします。（小田）

次回の予定

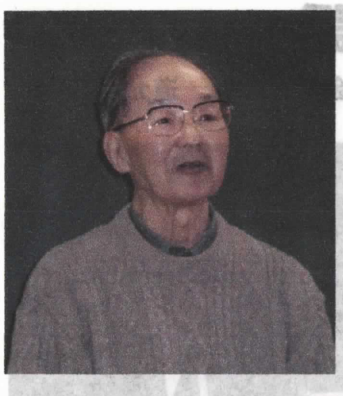
次回（4 月 8 日）は、水落恒彦氏の会員研究「画家大月源二、富樫正雄との思い出」を予定しています。後半は、平成 21 年度定期総会を行います。

第34回（平成21年2月11日）定例会の研究発表要旨

前田大尉とシベリア干渉戦争

……「前田利為（軍人編）」を読んで ……

手稲郷土史研究会会員　吉田　寛義　氏



吉田会員は大東亜戦争（太平洋戦争）中の陸軍士官学校第60期生。同17期の大先輩前田利為侯爵が手稲地域開発の「大農場主とはよく知らなかった」と、敬意と親しみも含め発表した。候が持つ農林牧場主、軍人、政治家、華族として、広い仕事や豊かな見識をもった人間像を「軍人の一面とシベリア出兵」を中心に語った。

（北樺太から西はバイカル湖まで広大な出兵地域を地図、年表で示す）

「シベリア出兵（大正7～14年）は旧満州とシベリアの鉄道と資源確保目的の出兵占領が軍事上意義があっても政治的には無名の師（大義名分の無い戦争）で最終的には国際的な理解と信用を失った」とされる。出兵中に起きた尼港（ニコライエフスク）事件で日本人多数殺害の仇討と称した海賊江連力一郎が手稲温泉光風館に潜伏。手稲駅で捕わると郷土夜話でも有名。「小樽に尼港事件記念碑もある」「出兵の月寒第25連隊辻大尉の戦訓記録メモが市スキー記念館に残っている」由。7万人の出兵、7億円の戦費、戦死傷者8千人の犠牲を払って、ゲリラ戦（パルチンザン戦法）の泥沼から撤退する。明治の元老山県有朋元帥が「米国はもとより英仏も日本の野望を警戒している。願ワクハ為政者ノ深ク茲に芳慮アランコトヲ」と出兵慎重論に前田候は賛成。暴走する軍に対する寺内首相や原政友会総裁らの批判も無視する軍主流に批判的見解を提出し続ける。候は第一次世界大戦後の国内経営を主とし各国との協調を旨とする山県説に立ち情報将校、従軍・駐在武官としての滞欧や帰国後の米国研究による欧米列強の情報や実態報告から導き出し説いた。この一端は大正6年8月前田農林牧場、共和町（旧前田村）を調査視察指導の折、乞われ市豊平館で講演した新聞記事で残っている（茂内副会長提供）。吉田会員はこれを活用され今後の戦争は日露と異なり「挙国戦（国家総力戦）となり前線と銃後の区別なく人命、物資、戦費も大惨害を受ける。」と30年後の大戦を予見し第一次世界大戦の戦訓を学び国内経営に全力を注ぐべきと主張したと評価し紹介している。更に候は、予想される日米アジア決戦に備えて、フィリピン、グワム島などの「兵要地理」研究に当たり、民情、産業、宿泊可能数などの情報活動も報告しているという。しかし軍部主流は「統帥権」の独立（明治憲法で認めた天皇直結の軍制）を楯に内閣も外交も無視し二重外交となり、シベリア出兵のゲリラ戦敗北にも軍事学者クラウゼヴィッツの「戦争は政治の延長」「名分なく敵地に軍隊を進めるとすべてが敵となる」の戦訓にも目をつぶった。その結果日中戦争のゲリラ戦泥沼化、無惨な日米戦の大敗北に連なったとし、吉田会員は前田候に「もう一歩陸軍の統帥権に意見を言ってほしかったし残念」と結ばれた。正に軍の改革を陸軍大学校長、師団長、参謀本部員、侯爵として提言故に陸軍大学同期の東条英機陸軍次官ら主流派により突如「統帥問題に由り上諭退職に決定した旨」と昭和14年追放され予備役となる。

候は、最早救国の道は政治家として貴族院議員以外道なしと決意し実行。3年後戦局不利となるや、軍主流は昭和17年現役復帰とボルネオ守備軍司令官を命令する。国外追放扱いであり惜しくも運命の南海の空と海の中で戦死されたことを付記したい。吉田会員は主に伝記『前田利為（軍人編、事業編2冊）、細谷千博『シベリア出兵の研究』ほかを良く研究され、会員や区民になじみ少ない分野を努力して紹介下さったことに感謝したい。　［文責：野村武雄］

鉱山部会の例会と役員会のお知らせ

鉱山部会の次回例会は3月23日です。西尾貞敏氏を招いて学習会を行う予定です。

例会の後（15時から）は、役員会です。

会場は、手稲区民センター2階　第3会議室